

# 必要のない人間

大島  
行雲

駅の改札で女の子が泣いてた

涙で頬を濡らし 携帯電話を握りしめ

駅前広場は水たまり

帰り道 女の子が近寄ってきた

マッサージ いかがですか？

やりきれない

苦汁に満ちた世界

世界は遠くで回ってる

飲み残しの酒は ただ

空き缶の底で捨てられるのを待つだけ

逃亡への衝動 絶望への希望

いずれにしろ 俺は役立たずで

生きる事は苦しみでしかない

もう駄目なのかもしれない

何かが欲しい

強烈な何かが

今の閉塞を変える何かが

頭に粘膜が貼り付いて

正気と気力を奪い取っていく

問題を起こす人は 言わずに溜め込むから

彼はそう言うけど

口に出して言える世の中なら

問題なんて起こらない

皆 静かに笑って

心の内を明かさない

それは多分 自分も同じで

だけど もう たくさんだ

扉を開かなきゃ

君は言うけど

君を信じようとするたび

君に裏切られる

信じたい

ずっと前から

そう望んできた

真実は見えなくて 嘘には理由があつて  
それが思いやりだから  
どうにもならない

何が君の為なのか

もう馬鹿な事はしたくない

もう誰も困らせたくない

相変わらず 何かに頼ろうと

無駄な希望を抱いてる

無重力の虚空で立ち尽くすしかない

それは昔から知ってた筈なのに

誰かの為に生きるのはやめよう

彼女の言葉を読んで

必要とされる人間になるのはやめた

世界は貴様がいなくても回っていく  
社会は貴様がいなくても続いていく  
彼女は貴様がいなくても生きていく

君は俺に生きる意味を訊ねる

でも 意味がなけりゃ 生きちゃいけないのか  
何かを求めんな

動物のように生きる

機械のように生きる

ただ そこに存在して

ただ 何も与えようとせず

ただ 何も与えられる事なく

俺たちは 必要のない人間だ

それでいいと思ひ込め

目的を求めんな 意味を求めんな

結果を求めんな 好意を求めんな

俺たちは 必要のない人間だ